

## 初級教材『みんなの日本語』における聞き返しについて

吉里さち子

## 1. はじめに

日本語学習者である留学生は、日本語母語話者との接触場面で聞き取れなかったり、理解できなかったりすることが多々起こるはずである。それを「まだ日本語がうまくないから」「まだ習ってないから」という学習者自身の責任で片付けてしまい、獲得しなければならない情報でさえも、諦めてしまったりしていないだろうか。

「聞き返し」は、反復や確認、説明などを相手に要求し、相手の情報をより正確に受け取り補おうとする聞き手の積極的な態度を表すコミュニケーション・ストラテジー（以下 CS とする）の一つである。日本語力の乏しい初級学習者は、相手の日本語が分からない場合の対処方法として、多くの場合そのまま聞き流してしまうことが多い。聞き流してしまっただけでは必要な情報も得られず、また話し手の日本人には「自分の話した内容には関心がない」と誤解されかねない。「聞き返し」は、単語の繰り返し、決まったフレーズの使用、また、発話内容の要約などで表現できるものなので、初級学習者にとっても日本語の学習として、それほど負担になるものではない。

本稿では、初級会話1の会話テストでみられた「聞き返し」発話例を分析し、使用教科書『みんなの日本語』やその他の初級教科書での「聞き返し」の扱いを分析考察する。

## 2. 「聞き返し」の表現形式

日本語の「聞き返し」に関しては、南(1985:69,71-74)、仁田(1987:184-185)、鮎澤(1987:7)などが日本語母語話者の話し言葉の特徴の一つとして、「聞き返し」に触れている。日本語学習者の「聞き返し」を中心に取り上げているのは、堀口(1990)、尾崎(1992,1993)、西條(1999)、二田(2000)などで、特に尾崎(1993:21)では、「聞き返し」の発話意図の類型化が試みられ、さらに尾崎(1992:252-253)、や二田(2000:14-15)では表現形式の分類も行われ、実際にどのように学習者に「聞き返し」を提示したらよいか明確になりつつある。

尾崎(1993)は、「聞き返し」の発話意図について次のように分析している。

「聞き返し」の発話意図(尾崎 1993:21)

「反復要求」:相手の発話が聞き取れなかったときに出される。

「聞き取り確認要求」:聞き取りに自信がもてないときに相手に確認を求める。

「説明要求」:相手の発話は聞き取れたが意味がよく分からないときに出される。

「理解確認要求」:自分の理解が正しいかどうかを確認するように求める。

「反復 / 説明要求」:「反復要求」と「説明要求」の組み合わせ

「聞き取り確認 / 説明要求」:「聞き取り確認要求」と「説明要求」の組み合わせ

また、二田(2000)では、「聞き返し」の形式に着目し、以下のように分析している。

「聞き返し」の表現形式(二田 2000:14)

例に挙げる NS は「日本語母語話者」、L は「学習者」

A) 「単語繰り返し型」

NS;塾(L;塾)は…韓国で言うと…学院みたいなもの、学院。

L ;学院

B) 「フレーズ繰り返し型」

NS;えーとー、授業によると思います。

L ;授業による

C) 「間投詞型」

NS;や…あー…見た目は

L ;あ

D) 「『もう一度』型」

NS:韓国のイメージ …うーん、キム、キムチ、焼肉 勤勉。

L ;…もう一度、すみません。

E) 「『～って何』型」

NS;韓国のイメージ…身近な、国…というイメージがあります。

L ;身近な 身近なは何ですか 身近な…

F) 「相手の発話調整型」

NS;えーっと、公式な試験では多分…追い出されるのでいないと思うんですけど…

L ;あ、すいませんが、もっとゆっくり話してください。

G) 「要約型」

NS;子供の、子供を見る、様子、様子を見るということで、一緒にお風呂に入っているのだと思います。

L ;親の後に子供が入ると言う意味ですか

本稿では、尾崎(1993:21)の「聞き返し」の発話意図分類と、二田(2000:14-15)の「聞き返し」の表現形式を利用して、会話テストに現れた初級学習者の「聞き返し」発話例の分析を行う。

### 3. 初級会話1 会話テストにおける「聞き返し」

今回の初級会話1 会話テストでは、どのような「聞き返し」が使われたのだろうか。「聞き返し」の表現形式の二田(2000:14)で挙げた7つの表現形式に当てはめてみると、主に「単語繰り返し型」と「要約型」の二つが多く用いられていた事が分かった。以下に実際の例を挙げてみる。会話[A]～[D]の4つの会話とも、会話テストの設問は「あなたの国へ友達が旅行にいきます。アドバイスをしてください。」という内容で、学習した「～てください」「～ないてください」を使えるかどうかをみるものであった。

#### 3-1. 「単語繰り返し型」を用いた例

会話【A】(I:講師、L:留学生)

I: (人名)さん、私は、休み、春休みに、インドへ行きます

L: あー

～ 中略 ～

I: じゃあ、なんか、気をつけてください、ありますか。

L: 気をつけ... **単語繰り返し型**

I: うん、なんか、こう...寒いですから

L: あ、寒いじゃありません

I: あ、そう

会話【B】

I: 研究室の皆さんは、インドネシアに行きますよね。

L: ん、はい。

I: 行きますよね。ま、たとえばでいいんですけど、旅行に行きますね、インドネシアに。で、(人名)さんは、アドバイスをしてください。

L: はい。

I: どんなアドバイスをしますか。

L: あんーどんな、あ、あ、 **単語繰り返し型**

I: advice, advice

「単語繰り返し型」は、聞き取れなかった部分を繰り返すことで理解できなかった部分を相手にもう一度発話するように促す機能がある。会話 B の例は、学習者が「アドバイス」という言葉がよく分からず、反復するように要求していることが相手の I にも伝わり、情報不足が解消されている。しかし、会話 A の例は、直前の「気をつける」という言葉が聞き取れず、また意味も分からなかったため、それを補おうとしたが、その反復要求と説明要求のどちらの意図も相手の I にもうまく伝わらず、情報不足は解消されなかった例である。

3-2. 「要約型」を用いた例

会話【A】(I:講師、L:留学生)

I: あなたの国へ友達が旅行にいきます。アドバイスをしてください。

L: アー、どこで旅行... **要約型**

I: 日本から

L: 日本の留学生

I: そう

L: インドへ行きました

I: あ、日本の、学生、鹿児島大学の人たちが

L: はい

I: (人名)さん、私は、休み、春休みに、インドへ行きます

L: あー

会話【C】

- I: たとえば、友達が、ミャンマーへ旅行に行きます  
 L: はい  
 I: どんなアドバイスをしますか。アドバイスをしてください。  
 L: **私が友達が** **要約型**  
 I: うん  
 L: **ミャンマーへ** **要約型**  
 I: うん、旅行に行きます

会話【D】

- I: ネパールへ友達が旅行に行きます。アドバイスをします。どんなアドバイスをしますか。  
 L: **日本から?** **要約型**  
 I: ん、日本の友達が、たとえば、ネパールに  
 L: あー  
 I: 旅行に行きます

会話 A,C,D のどれも、繰り返しを用いず、自分の言葉で言い換えて、説明や確認を要求している発話になっている。会話 A は説明を要求している部分を疑問詞「どこ」で置き換えた説明要求の要約型、会話 C、会話 D は自分が理解した情報が正しいかどうかを確認する確認要求の要約型となっている。要約型は、先に挙げた「繰り返し型」よりも発話意図が伝わりやすく相手の I から補うべき情報が伝えられている。

二田(2000:28)では、「単語繰り返し型」より「要約型」の方が情報の不足を補うことができるとしているが、この会話テストからも同様のことが観察される。しかし、会話【A】や会話【C】などの要約型は不完全と言わなければならない、例えば会話【A】は「どこで旅行…」を「どこで旅行しますか/どこへ(から)旅行に行きますか」、会話【C】は「私が友達がミャンマーへ」を「私の友達がミャンマーへ行きますか」というふうには訂正したり、文の後半を補ったりしなければならない。今回の会話は、聞き手が授業を担当した講師であったので、留学生が尋ねたいことを先回りして解釈することができたが、そのような立場にない日本語母語話者では、せっかく「要約型」の「聞き返し」で情報の不足を補ったり、確認を求めたりする意思があっても、うまく伝わらない可能性がある。

本稿では統計的な分析はなされていない為、数値的な裏づけはできないが、二田(2000:28)にあるように、繰り返してほしいのか、説明してほしいのか発話意図が曖昧になりやすい「繰り返し型」より、発話意図が明確になる「要約型」を用いた方が、情報が不足している部分をより堅実に補うことができると言える。

#### 4. 初級日本語テキストにおける「聞き返し」

初級会話1のクラスのメインテキストは、『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク, 1998)である。この中で「聞き返し」が出てくるのは、第1課と『みんなの日本

語』の第33課の2箇所のみである。

『みんなの日本語』の対象は、そのまえがきにあるように「日本語によるコミュニケーションを今すぐ必要としている外国人」である。会話や、練習Cのまとまった談話でのドリルなど、コミュニケーションを重視している構成になっているが、初級日本語学習者に必要なCSを補うというまでには至っていないと言わざるを得ない。

第1課の「聞き返し」は「イー」を「リー」と間違えて繰り返してしまっているが、二田(2000:14)の「聞き返し」の表現形式では「フレーズ繰り返し型」にあたり、確認を要求している。

#### 第1課 練習C - 1

A:失礼ですが、お名前は？

B:イーです。

A:リーさんですか。 繰り返し型

B:いいえ、イーです。

(『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク 1998:11))

初級会話1のクラスで学習したのは第19課までである。したがって、実際に受講生が「聞き返し」に触れたのは、第1課のみということになる。

第33課の「聞き返し」は、同様に二田(2000:14)の「聞き返し」の表現形式では「『～って何ですか』型」にあたり、説明を要求している。

#### 第33課 会話

<<略>>

大学職員:「ちゅうしゃいはん」です

ワット: ちゅうしゃいはん…、どういう意味ですか？ 『～って何』型

大学職員:車を止めてはいけないところに止めたという意味です。ワットさん、どこにとめたんですか。

<<略>>

(『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク 1998:61))

トムソン木下(1994:38)では、様々な初級日本語教科書を使って「聞き返し」について分析されている。その中で、最も多く「聞き返し」が現れていたのは、『技術研修のための日本語』(国際協力事業団 1985)で、

A:サリムです。

B:サリーさんですか。 繰り返し型

『技術研修のための日本語』(国際協力事業団 1985:3)

A:東京までいくらですか。

B:え？東京ですか。 繰り返し型

同 (国際協力事業団 1985:27)

A:346-5142です。

B: すみません。もういちどゆっくりおねがいます。 相手の発話調整型

同 (国際協力事業団 1985:57)

A: ここは禁煙ですよ。

B: き・ん・え・ん? 繰り返し型

同 (国際協力事業団 1985:145)

「サリーさんですか」「え?東京ですか」のような確認要求の「フレーズ繰り返し型」、  
「すみません。もういちどゆっくりお願いします」のような「相手の発話調整型」、  
「き・ん・え・ん?」のような説明要求の「単語繰り返し型」などバリエーションも  
多い。この『技術研修のための日本語』は、日本語母語話者とコミュニケーションを  
とりながら、作業を進めていく場面が強く意識されているため、多くの箇所に CS の  
一つである「聞き返し」が盛り込まれているのだと考えられる。

『技術研修のための日本語』は研修員などを学習対象者として作られたテキストであるのに  
対し、『新文化初級日本語』(文化外国語専門学校編 2006)や『Situational Functional  
Japanese』(筑波ランゲージグループ 1996)は大学や専門学校など高等教育機関で学  
ぶ学習者を対象としているテキストであるため、出てくる語彙や表現、会話の場面な  
どが異なっている。また、ビジネスマンを対象にした『Japanese For Busy People』  
(国際日本語普及協会 2007)も前の2つのタイプのテキストとは違うビジネス上の  
様々な場面が設定されている。前のトムソン木下(1994)の分析にはないこの3つのテ  
キストについて、「聞き返し」がどのように扱われているかを以下に挙げる。

遠藤:...(中略)...洗面所にコインランドリーがあります。

ワン: えっ?「コイン...」すみません、もう一度言ってください。 単語繰り返し + 『もう一度』型

遠藤: コインランドリーです。洗濯機です。

ワン: ああ、洗濯機ですか。わかりました。

『新文化初級日本語』第6課(文化外国語専門学校編 2006:79)

女子学生: せんとく機なら、4階のあっち側にありますよ。

ブラウン: 4階ですか。 要約型

女子学生: ええ。

『Situational Functional Japanese』volume1NOTES 第4課(筑波ランゲージグループ 1996:76)

<<略>>

田中: ああ、食堂の自動販売機のとりにありますよ。

シャルマ: じどう... 単語繰り返し型

田中: 自動販売機。ほら、あのコーラとかじゅーすとかの。

シャルマ: ああ、わかりました。

『Situational Functional Japanese』volume1NOTES 第4課(筑波ランゲージグループ 1996:77)

女子学生: 事務所へ取りに来て下さいって。

シャルマ: 事務所って、宿舎の事務所ですか。 単語繰り返し型

『Situational Functional Japanese』 volume1NOTES 第5課(筑波ランゲージグループ  
1996:114)

ブラウン:(pointing at poster)このコンパってなんですか。 『～って何』型

山下 :ええと、先生や友達とパーティーをするんですよ。

『Situational Functional Japanese』 volume1NOTES 第5課(筑波ランゲージグループ  
1996:115)

<<略>>

かとう:おおきい おてらや じんしゃが あります。 おんせんも あります。

チャン:おんせんって なんですか。 『～って何』型

かとう:(shows her a pamphlet and points)これです。 にほんの スパですよ。

『Japanese For Busy People 』Lesson8(国際日本語普及協会 2007:69)

<<略>>

マルタン :レストランは専用のエレベーターがあるんですよ。エスカレーターで2階に上がると、右側にあります。

鈴木 :えっ、2階のどっち側ですか。 よく聞こえないんですが。 要約型

マルタン:右。右側です。

『Japanese For Busy People 』Lesson15(国際日本語普及協会 2007::234)

『新文化初級日本語』では1、『Situational Functional Japanese』では4、『Japanese For Busy People』では2の「聞き返し」が扱われている。このうち、『Situational Functional Japanese』が最も多く、形式も「単語繰り返し型」「～って何」型「要約型」と多様に扱われている。しかも、同じ課の中に Communication Notes と呼ばれる解説ページがあり、相手の発話を繰り返して聞き返すことができない場合「すみません。もう一度お願いします」「すみません。ゆっくりお願いします」など相手の発話を調整するための「聞き返し」や「じどう...」「自動販売機の...」など不完全な繰り返しを用いたもの、また「え」「はあ」などの間投詞を用いた「聞き返し」の3種類を提示し、かなり詳細に解説している。

また、『Japanese For Busy People』では、後半の Lesson15 で「要約型」を使った「聞き返し」を提示し、よく聞き取れなかった場合に用いる表現だとしている。

『新文化初級日本語』では、「聞き返し」の扱いは1カ所しかなく、「繰り返し型」と『もう一度』型」を組み合わせた表現で、反復を要求する発話意図がより明確になった「聞き返し」を扱っているのだが、「聞き返し」についての解説などはなく、『みんなの日本語』同様教える側の裁量に委ねられている感がある。

『みんなの日本語』と並び、初級日本語教科書として多くの教育機関で使用されているテキストにも未だCSの一つである「聞き返し」の扱いにはばらつきが見られる。CSについて積極的に扱っている初級日本語教科書として『Situational Functional Japanese』は未だに際だった存在であると言える。

トムソン木下(1994:31)は、「聞き返し」を用いることで日本語母語話者に「フォーリナーター

ク」をさせるきっかけを与え、理解可能な日本語レベルに調節し、コミュニケーションを成り立たせることができると述べている。教科書の中で CS としての「聞き返し」を扱い、クラスの中で学習する機会があってもよいのではないかと考えている。このような立場に立って考えると、『みんなの日本語』の中の、「聞き返し」のような CS の扱いは非常に貧弱なものだといえる。ただ単に繰り返せば「聞き返し」になるので日常的に習得できている、あるいは、言語に共通する特徴なので日本語の学習で取り立てて扱うことはない、という意見もあるかもしれないが、トムソン木下(1994:40)にあるように、「聞き返し」は情報の不足を補い、円滑なコミュニケーションを確立するために必要な手段である。また、「聞き返し」と一口に言っても、複数の表現意図や表現形式があるので、必要に応じて使い分ける手段を習得することは、初級日本語学習者の日本語力不足によって情報が得られないというフラストレーションを回避する上で必要なことだと考える。また、『Situational Functional Japanese』や『技術研修のための日本語』のような CS を多く扱ったテキストの内容を、『みんなの日本語』をメインテキストとした通常の授業の中に関連づけて教えていくことが重要である。

## 5. 「聞き返し」を学習する

ここまで「聞き返し」を学習する機会を与えることの必要性について論じてきたが、では実際どのような「聞き返し」を提示すればいいのだろうか。二田(2000:17)では「聞き返し」の表現形式と習得のための難易度が3段階で示されている。習得が易しいとされているのは、「単語繰り返し型」「フレーズ繰り返し型」「間投詞型」である。この三つの表現形式は、言語自体に備わっている機能なので、学習者はそれぞれの母語で用いているものを応用することができると考えられる。しかし、この三つはあくまでも繰り返してほしいとき、確認したいときに用いるもので、意味がよく分からないからといって安易に繰り返しても、情報の不足は補えないということに触れておく必要がある。ちょうど真ん中に位置しているのが「もう一度型」「～って何型」「相手の発話調整型」の三つである。これは、日本語のみならず各言語で独自の表現があり、それを知っておかなければ使うことができないため、学習が必要になる。具体的には、以下の表1のようになる。

表1 学習する機会が必要な「聞き返し」の表現形式と文例

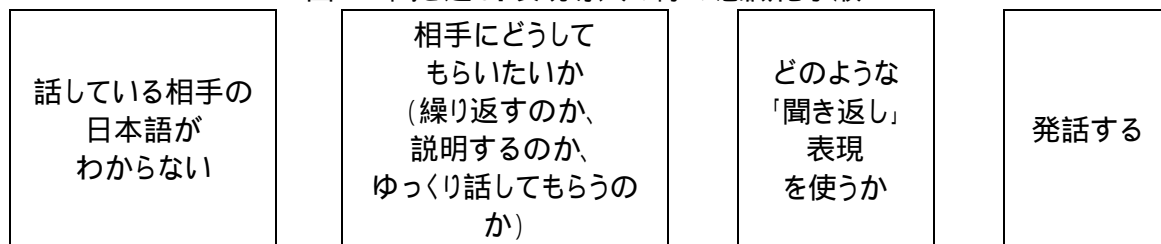
表現形式	発話意図	文例
もう一度型	反復要求	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ え？もう一度</li> <li>・ もう一度、お願いします。</li> <li>・ もう一度、教えてください。</li> </ul>
～って何型	説明要求	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シュウカツって何ですか？</li> <li>・ シュウカツってどういう意味ですか？</li> </ul>
相手の発話調整型	発話調整要求	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ちょっと速いですが...</li> <li>・ ゆっくりお願いします。</li> <li>・ もう少しゆっくり話してください。</li> </ul>

表1の「え？もう一度」などは、学習期間の短い学習者でもとりあえず「聞き返し」が使えるように考えたものである。実際に学習する際には、情報の不足をどうやって補うか、話している相手に何を要求するためにどの「聞き返し」の表現を使うのかということを経験者に意識させた上(図1)で、それぞれの発話意図に沿って「聞き返し」の表現形式や文例を提示していくと、



実際の使用場面でのアウトプットが期待できるのではないだろうか。

図1 「聞き返し」表現導入の際の意識化手順



また、「聞き返し」の中でも習得が難しい「要約型」は「～ということですか」「～ってどういう意味ですか」など、直前の相手の発話を自分の言葉に置き換えなければならない、ある程度の日本語力がなければ難しいが、4-2.「要約型」を用いた例のように、初級の学習者でもできないわけではない。まずは、中程度の「もう一度型」「～って何型」「相手の発話調整型」の表現形式を習得した段階で、「要約型」にも果敢に挑戦させるのがよいのではないだろうか。

## 6. まとめ

本稿では、コミュニケーション・ストラテジーの一つである「聞き返し」に焦点をあてて、初級会話1クラス会話テストで「聞き返し」が情報不足を補う重要な役割を果たしたこと、また、その中でも安易な「単語繰り返し型」より「要約型」の方が情報の不足を補う上で有効であったことを明らかにした。しかし、留学生が用いた「聞き返し」は、使用教材である「みんなの日本語」の学習項目にはほとんどなく、『みんなの日本語』がコミュニケーションを重視した構成でありながら、日本語での接触場面におけるCSの習得には教授者が補わなければならない部分がかかなりあることを指摘した。CSは、初級日本語学習者が接触場面での相手である日本語母語話者のフォーリナートークを引き出し、相手の日本語を学習者の理解可能なレベルに調整するために必要な手段であり、学習時間が短ければ短いほど、日本語による情報の不足を補うために重要な役割を担っている。

日本語の「聞き返し」には、複数の表現形式があり、その中には言語に共通して存在するものもあり、全てを逐一学習する必要はないが、学習項目として提示しなければ習得する機会が得られないものもある。「もう一度型」「～って何型」「相手の発話調整型」である。これらを学習項目として早くに提示することは、初級学習者の数少ないCSの一つとして非常に有効である。また、学習項目として提示する際は、分からないという場面で、どのような表現を使ったらいいのかを学習者に意識させた上で、「聞き返し」表現を提示することが必要である。また、「聞き返し」と聞いて、単に繰り返せばいいという安易な考えは、学習者自身が抱えている情報の不足を解消できない可能性があるため、特に聞き取れても意味がわからないといった場面では、避けた方がいいということも触れておかなければならない。

学習者自身の母語のように使いこなせない日本語で「聞き取れない」「意味がわからない」などの情報の不足が起こったとき、「聞き返し」はその穴を埋める有効な手段である。明確な意図を持って「聞き返し」の表現を用いれば、学習者の日本語の理解も更に向上し、日本語母語話者との円滑なコミュニケーションも期待できる。さらには、日本語学習、日本での生活、日本人との相互理解も促進させ、留学生活全体をプラスに導く重要な手助けになる可能性も

秘めている。

---

参考文献

1. 鮎沢孝子(1988)「話しことば」の特徴 - 聴解指導のために - 、『日本語教育』64号
2. 尾崎明人(1991)「接触場面の訂正ストラテジー - 「聞き返し」の発話交換をめぐって - 、『日本語教育』81号
3. 尾崎明人(1992)「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」、『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
4. 西條美紀(1998.3)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
5. トムソン・木下千尋(1994.6)「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」、『世界の日本語教育』第4号
6. 二田さち子(2000)「日本語学習者の『聞き返し』及び『活動前シミュレーション』の有効性 日本語母語話者とのインタビュー活動からの検証」熊本県立大学大学院文学研究科修士論文
7. 仁田義雄(1987)「日本語疑問表現の諸相」、『言語学の視界』大学書林
8. 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」、『日本語教育』64号
9. 堀口純子(1990)「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」、『日本語教育』71号
10. 南不二男(1985)「質問文の構造」、『朝倉日本語新講座4 文法と意味』朝倉書店

(留学生センター非常勤講師)